

旦那様、その『溺愛』は契約内ですか？

目次

プロローグ	突然の個人面談	5
幕間	開発部の井戸端会議	10
第一章	仰天のワークミッション	14
第二章	現状打破のみだらな提案	29
第三章	日なたのような君に恋をした	81
第四章	前途多難の兆しに心の傷の克服を	93
第五章	意気消沈に、心は絶望の雨を降らす	140
第六章	あなたを愛しているから、その体に刻みたい	167
第七章	一陽来復で愛し合おう	205
エピローグ	秋の実りと恋の実りに満たされて	260

プロローグ 突然の個人面談

生活用品の製造・開発を手がける大手メーカー、ハバタキユーズ。都内にある本社開発部で働く私こと、雛田七菜は、本日、上司の鷹沢部長に呼び出された。

手狭なミーティングルームで、テーブルを挟んで向かい合わせになっている私達。

鷹沢部長はノンフレームの眼鏡のブリッジを指で押し上げて、私を睨み付けた。きらりと冷たく、眼鏡のツルが光る。

——うう、怖い。憤怒の表情をした不動明王かと思うほど、部長はとっても顔が恐ろしくて、睨まれると震えてしまう。

そんな不動明王……じゃない、鷹沢部長は、机に置いていたノートを広げて、ボールペンのノック部分をカチリと押す。

真面目で堅物、社内一ストイックだと言われている鷹沢部長は、仕事にまったく妥協をせず、自分にも他人にも厳しい。そのあり方から社内では密かに『鬼侍』と呼ばれていた。

ハバタキユーズの社長子息という噂もあるのだけど、部長はプライベートをまったく話さないの
で、わりと謎に包まれた人である。

「雛田さん、急に呼び出してすみません。新プロジェクトに関して、いくつか質問したいことがあります」

「はあ……」

どうやら怒られ案件ではないらしい。私は内心ホッと安堵した。

私は新卒でハバタキユーズに入社し、開発部に配属されて以来、開発部部长である鷹沢部長には毎日のように叱られているのだ。すべては仕事ができない私が悪いのだが、同僚にも先輩にも「鷹沢部長は雛田さんに一際厳しいと思う」と言われている。

間違いなく、どんくさい私を嫌っているのだろう。

鷹沢部長はスタイルがよくて、肩幅が広くて、ビジネススーツ姿がビシッと決まっっていて、おまけに仕事もできる。実に完璧な人だ。もう少し人間味のある性格をしていたら、目に見えてモテていたに違いない。実際、怖くて声をかけづらいけど、密かに憧れている女性社員は多いと聞いているし、私も入社当時は素敵な人だと思っていた。しかし今ではすっかり嫌われているのがわかって、その憧れも霧散したのだけだ。

「では早速、質問を開始します。現在、雛田さんには恋人がいますか？」

「はいと？」

思いもよらない質問を唐突にされて、私は驚きの声を上げてしまった。

すると鷹沢部長は『なにか？』と言いたげに、片方の眉を上げた。

「はい。プライベートな質問で申し訳ありませんが、答えてもらえませんか？」

「え、はい。……でも、えっ？」

オロオロと困惑する私だが、鷹沢部長は普段通りの無表情で、淡々としている。

——な、なんで恋人がいるとか聞くの？ そんなの仕事に関係ある？ ないよね？

でも、新商品の開発に必要な情報なのかもしれない。恋人のいるいないが、新商品にどう関わることかサッパリ想像つかないけど。

「いません……」

ボソッと小声で答えると、鷹沢部長はノートにメモを取り始めた。

——え、待って。『雛田、恋人なし』とか書くの？ 個人的にやめてほしい。だって、なんだか情けなくない？ 雛田（二十三歳）恋人なし。って！ どうせないよ！ 見栄でも『いる』って答えればよかった。どうして素直に答えちゃったんだよ、私。

「では、恋をしている人はいますか？」

「はい！」

ふたたび目を剥いた私に、鷹沢部長は不機嫌そうに目を細めた。怖っ。

「もしや、いるのですか？」

「いやいや、恋なんてそんな……なに言わせるんですか……？ い、いませんけど……」

ボソボソと答えて、また切ない気持ちになる。

どうせ恋人もいないし、好きな人もいないよ。そして、しばらくは作る気もないよ。

実は私は男性が苦手なのだ。もっとうつと、鷹沢部長は私的社内の苦手男性ランキングのトップ

である。

鷹沢部長は、私の返答に心なしかホッとしたような息を吐き、眼鏡のブリッジを指で押し上げる。「そうですか」

ボールペンで、なにやら書き足す。さつきから一体なにを書いているんだろう。『籬田は現在彼氏がなくて好きな人もいなくて非常に干からびた人物である』とか……？ いやだな、そんな書き方されたら泣いてしまう。

メモを終えた鷹沢部長は、ボールペンを机に置いた。

「ちなみに、料理はできますか？」

「えっ？ ま、まあ、できますけど、そんなに上手じゃないです」

「なるほど。では、掃除は？」

「……自分の部屋を掃除する程度なら、やっています」

「ふむ、特にこれといって得意というわけではない、ということですか？」
きらりと眼鏡のフレームを光らせて訊ねる。

——なんだろう。得意じゃないとダメなのかな？ でも、ここで嘘を言うのはよくないよね。

「はい。恥ずかしながら、そこまで得意ではありません」

料理はお母さんのごはん作りを手伝う程度だし、掃除だって適当だ。

すると鷹沢部長は「ふむ」と頷いた。今の頷きには、どういう意味があるのだろうか。

「わかりました。おおむね、問題ありませんね」

「あの、話がまったく見えないんですけど……」

「ぶしつけな質問をしたこと、謝罪します。説明は後日しますので、今日は終了とさせていただきます」
「やっ」

ノートを閉じて、鷹沢部長が言う。

「はあ……。ちゃんと説明してもらえらるなら、別にいいですけど……」

戸惑う私の脇を通った鷹沢部長は、すたすたとミーティングルームを去っていった。
パタンと扉が閉められて、私はグルッとうしろを向く。

「い、一体なんだったの？」

彼氏がいるのかとか、好きな人はいるのかだとか、家事ができるかどうかとか。どう考えても仕事にまったく関係ないよね。

「……はっ、ま、まさか、セクハラ？」

口に出してから、首を横に振る。

いやいや、あの鷹沢部長に限ってセクハラなんてありえない。鋼はがねの男だよ？ ストイックさ社内ナンバーワンの鬼侍だよ？

「新プロジェクトに関する質問って言っていたし、きっと新商品のアンケートだったんだよ。独身女性をターゲットにした商品開発とか、きっとそんな感じなんだ、うん」

無理矢理理由をつけて、自分を納得させる。そして私もミーティングルームを後にして、仕事に戻った。

さて、俺はハバタキユーズ開発部のエース、木村と申す。開発部に配属されて五年。鷹沢部長に次ぐ古株だ。

「木村く！ あんたまた企画書の項目間違えてるよ！ 一体何年ここで働いてるのよ。後輩のあたしのほうが企画書の作成わかってるって問題じゃない？」

ベシベシと俺の頭に書類をたたきつける女は、可愛い顔をして生意気な後輩、古式である。

大先輩エースに対し、なんとという態度を取るのだ、この後輩は。だがしかしエースというのは俺の自称だから、敬われなくても仕方ない。そのうち鷹沢部長をぎゃふんと言わせてエースになる予定なのである。

「そういえば鷹沢部長、雛田ちゃん連れてどっかいつちやったけど、またお小言かな」

思い出したように古式がミーティングルームへと続くオフィスの扉を見つめる。

俺も頭にのせられた企画書を受け取りつつ、ドアを見つめた。

「ああ、雛田ね。あいつは本当に不憫だよな、鷹沢部長に目エ付けられてさ」

「あの子は総務部のほうが向いてそうなのに、なぜだか我が社の地獄に落とされちゃったからねえ」

「おのれの部署を地獄とか言うなよ」

俺がツツコミを入れると、隣でキーボードを叩いていた同僚がグルツと振り向く。

「いや、まさにここは地獄の部署さ。その証拠に、鬼の侍が部長じゃないか」

ハツハツハと朗らかに笑う同僚の額には、貼り付けるタイプの保冷剤がくっついていて。彼は今、作成中の企画が大詰めに入っているので、修羅の如く仕事をしているのだ。

「雛田は頑張っているって、開発部の皆が思ってるよ」

「努力家だしね。だからこそ可愛いんだけど……鷹沢部長にはまだ頑張り不足に思えるのかなあ」
古式が心配そうな顔をしている。

そうだ。雛田はよくやっていると。エース（予定）の俺が言うのだから間違いない。だが、鷹沢部長は、雛田が入社した初日から厳しかった。そして現在も、鷹沢部長の雛田に対する態度は一際冷たい。

言われた仕事を成し遂げても、称賛は一切なく新たな仕事を与えられるだけで、少しでも手間取っていると注意が飛ぶ。

鷹沢部長は冷徹な上司だが、決して無情ではない。部下の使い方を熟知している人だから、褒める時はちゃんと褒めるし、部下の実力も認めている。

それなのになぜか、雛田に対しては一貫して厳しいのだ。

「いい子なのに、なにが気に食わないのかなあ」

「今頃、ぼろくそに言われているのかねえ」

「開発部やめたって言い出さないといいけど……。ほんと、鬼侍も加減しろよなあ」

俺達が輪になって話していると、唐突にガチャリとオフィスの扉が開いた。

現れたのは、鬼侍こと、鷹沢部長。相変わらずのしかめ面で、整った相貌は岩石のように硬く厳めしい。

鷹沢部長は、こちらをジロツと睨んだ。

「皆さんで集まって、なにか問題でも起きましたか」

「あつ、いいえ！ なんでもないです！」

俺達は立ち上がり、ビシツと手を額に当てて敬礼した。まるで軍隊であるが、まさしく開発部は日々を戦う戦士の集まりである。研究費について常に文句を言う経理部と、素人のくせに開発商品へのダメ出しは一人前な営業部と戦う武士である。

様々な部署の板挟みになっているのに、鬼侍と呼ばれる鷹沢部長はいつだって動じない。毎日様々と仕事をし、的確な指示を飛ばし、経理部を黙らせ、営業部には商品理解のための勉強会をこまめに行う。

恐ろしく仕事ができる上司なので頼りがいがあるものの、鷹沢部長の睨み顔はめちゃくちゃ迫力がある。せつかく顔がいいのにもつたいないなと思うほど、部長からにじみ出る凍てついたオーラが怖い。実は社長子息って噂も聞くけど、勇気が出なくて誰も聞けずにいる。

こんな人とふたりきりになって、徹底的に絞られた雛田は、さぞかし恐怖しただろう。案の定、鷹沢部長から少し遅れる形でオフィスに戻った雛田は、疲れた顔をしていた。

よっぽど怒られたに違いない。

「可哀想に……。後でチョコレートでも差し入れてあげよつと」

古式がそう呟いて、自分のデスクに戻っていく。

俺も、缶コーヒートを奢ってやろうと思った。思わず開発部全員が同情してしまうほど、鷹沢部長の雛田へのスパルタ教育ぶりは有名なのだ。

第一章 仰天のワークミッション

——私は、仰天ぎょうてんした。まさかこんな事態になってしまふなんて、誰が想像しただろう。

鷹沢部長との奇妙な面談の翌日。なんと私は新商品開発プロジェクトの総合アシスタントに指名されたのだ。

朝一番の朝礼の時、鷹沢部長はいつも通りの仏頂面ぶつどうめんで、ノンフレームの眼鏡のツルを、軽く指でつまんで位置を正した。

「今挙げたメンバーが今期のプロジェクトの主軸ですが、新商品の開発は部全体の協力が不可欠です。皆で支え合い、開発部一丸となって頑張りましょう。それでは仕事に戻ってください。プロジェクトメンバーは私のデスクに集合するように」

鷹沢部長の号令で、開発部の皆はわらわらと自分のデスクに戻り、そして名を挙げられたメンバーは部長のデスク前に集合する。私もおそるおそる近づき、端はしに立った。

——うわあ、錚々そうそうたるメンバーだ。私を含めて全員で五人。もちろん全員先輩で、これまでに何度もヒット商品をたたき出したベテラン揃い。それに比べて私は、まだ入社二年目の新人で、しかも通常業務は雑務全般。いきなりこんなプロジェクトに入れるような人材じゃない。

——悪目立ちしてないかな。どうして私が、このメンバーに入っているんだろう。

所在なくオドオドしていると、鷹沢部長が咳払いをした。

「企画概要はこれから社内メールで送ります。来週頭にミーティングを行いますので、皆さんには企画書の作成をお願いします」

いつもの調子で、流れるように説明をしているけれど、私は驚愕きょうがくのあまり、口をぼかんと開けていた。

だって、来週頭つて、土日挟んでもあと四日しかないじゃない！ それまでに企画書を作れつて言われても、私、企画書なんて作成したことない！

どうしたらいいんだろう。先輩に聞けということなのかな。忙しいのに、聞いて大丈夫なのかな。そもそも『総合アシスタント』ってなに!? どんな仕事なの？

頭の中がグルグルする中、先輩達は冷静な顔つきで鷹沢部長に質問をしている。

「前回の企画時に問題視された製造部との連携は？」

「社内チャットの確認を徹底するよう、向こうの部長と話をつけました。こちらもそのつもりで、意思疎通を心がけてください」

「上層部へのプレゼンはいつ頃の予定ですか？」

「遅くとも二ヶ月後の予定です。半年後には製造ラインにのせたいですね」

次々と話が進んでいくけど、私はまったくついていけない。

いや！ ここで空気に吞まれて黙っていたら、なんのためのプロジェクトメンバーなのだ。

私だって、ちゃんと役に立たなきゃ。

とりあえず私も質問してみよう。

「はいっ！」

ビシッと手を挙げた。先輩達と鷹沢部長が、同時に私を見つめる。

——ひえ……怖い。新人がしゃしゃり出るんじゃないよとか思われたらどうしよう。

「あ、あの、その……私が指名された、総合アシスタントって、具体的になにをやるんでしょうか……」

怯えながら訊ねる私に、鷹沢部長は「ああ」と思い出したような顔をした。

「これから説明します。概要にも書いておきましたが、総合アシスタントは今回が初めての試みです。他に質問がなければ、皆さんは企画書の作成を。雛田さんは私と一緒に来てください」

そう言っつて、鷹沢部長はすたすたとフロアから出ていった。先輩達は各々デスクに戻り、早速仕事をし始める。

——うう、説明ってなんなの？　もしかして、前にミーティングルームでされた奇妙な質問の答えがあるのかな。

メモ帳とペンをポケットに突っ込んでから私もフロアを出ると、エレベーターの前に鷹沢部長が立っていた。

「部長、どこに行くんですか？」

「会社の外です。車を使いますが、十分もあれば到着します」

——え、車……？　戸惑う私を連れて、鷹沢部長は社員専用の駐車場に向かった。そして黒い車

の前に立ち、ピ、と電子音を鳴らしてドアロックを解錠する。

助手席のドアを開け、私に顔を向けた。

「乗ってください」

「は、はあ……」

仕事申なのに、いいのかな。いや、これから『総合アシスタント』の仕事内容が説明されるんだから、これも業務の一環なのか。

それにしても、変なの。どうして私だけ移動するんだろう？

戸惑いはあるが、助手席に乗る。

ところで、この車って、やっぱり鷹沢部長の自家用車なのかな。そこはかとなく高級感に溢れた内装だし、上品なオーデコロンの香りがする。

うーん、やっぱり、社長子息って噂は本当なのかも。

鷹沢部長は運転席に座るとシートベルトを留めて、車を運転し始めた。

「説明不足なのは重々承知しているのですが、実際に現物を見ながら話をしたいんです。不安にさせていたら、すみません」

問答無用で私を連れてきたことを、少しは悪いと思っっているらしい。

誠実な人だね。私は「いいえ」と言っつて、首を横に振った。

「後でちゃんと説明してもらえらなら、大丈夫です」

「ある程度の概要はプロジェクトのメンバーにも伝えてありますが、雛田さんに任せたい仕事はか

なり特殊なものなので、誰でもできる、とは言いがたいんです」

「そうですか。……そんなすごい仕事、私にできるのかなって、心配ですけど」

一体どんな仕事を任されるんだろう。ドキドキしながら言うと、鷹沢部長は車を運転しながら、目を伏せた。

「難田さんは目の前にある仕事を懸命にこなす方ですから、きっと仕事自体はうまくやってくれるだろうと思います」

思わず私は目を丸くして、運転席に座る部長を見た。

だって、こんな風に褒められるなんて初めてだ。いつだって私は鷹沢部長に叱しかられて、仕事のミスを注意されていたから。

「ありがとうございます。わ、私、いつまでも仕事が満足にできなくて、きっと部長に呆あきれられてると思っていたから、嬉しいですよ」

「……私が、あなたに呆あきれる？」

ぽつ、と鷹沢部長が呟いた。そしてなぜか、不機嫌そうに顔をしかめる。

「鷹沢部長？」

「そんなことはありません。むしろ……」

ハンドルを握りながら呟く鷹沢部長は、ゆるやかに道路をカーブして、ブレーキを踏んだ。

「話の途中ですが、到着しました」

「あっ、はい」

なにを言いかけていたんだろう。頭の端はたで考えつつ、私は慌ててシートベルトを外した。助手席を降りて、目の前に建つ建物を眺める。

「おうち？」

首を傾げた。鷹沢部長が車を停めたガレージの傍にある建物は、紛れもなく住居だった。

きよろきよるとあたりを見回すと、どうやらここは都内にある住宅地——それも『高級』がつくような場所で、周りの住宅はどれも敷地が広く、立派な建物が多かった。

庭には青々と茂る芝生が広がっていて、白を基調とした住居は建ててから日が浅いのか、とても綺麗きれいに見える。

「ここは鷹沢家が所有する土地のひとつです」

「鷹沢家……？」

首を傾げる。部長の苗字は確かに『鷹沢』だけだ。

「はい。最近私がい取ったので、今は私個人の所有物件になっていきますけどね」
「な、なるほど。……え、買い取った？」

待って。高級住宅地で、こんなに敷地の広い建物を、あっさり買い取ったとか言ったの？ 一体どれだけ稼いでいるの!? 私のお給料なんて、実家に生活費を入れるだけでカツカツだというのに、いや、手がけている仕事内容がまったく違うから、比べても意味がないのだけだ。

鷹沢部長はドアの錠を外し、真新しい玄関扉をガチャリと開けた。

「どうぞ。ここが、あなたの職場になります」

「え、私の……職場？」

目を丸くした後、おずおずと家の中に入る。ふわんと鼻孔びよをくすぐるのは、新しい住宅ならではの、みずみずしい木の匂い。

「あなたに仕事を任せるために、新しく家を建てたんです」

「へー、建てた……。建てた!？」

ぎよつとして、鷹沢部長に顔を向けた。

彼は『なにか?』と不思議そうな顔をする。

——い、いや、ここが私の職場、というのもちよつと意味がわからないけど、そのために家を建てたつて。家つて、そんな軽くポーンつて建てられるものなの? なんかこう、金銭的なものが大変なことになるんじゃないの? 住宅ローンを組むとか。でもこの軽い言い方からして、鷹沢部長がローンで家を建てたとは思えない。恐らく、キャッシュでポンなのだろう。

わあ……結構、引くなあ……

部長と私との間に、ものすごい隔たりがある。主に、金銭感覚的な意味合いで。

「玄関の奥がリビングです。そこにあるものを見れば、雛田さんにしていただく仕事がわかると思
います」

鷹沢部長が、私の前にスリッパを置きながら言う。私は玄関におつかなびつくり上がり、スリッパに足を入れた。

「リビングつて、ここですか?」

広い玄関ホールの正面にある、観音かんのん開きになった磨すりガラスのドア。鷹沢部長は頷いてから扉を開け、私をリビングの中に招き入れてくれる。

そこは、想像していたよりもずっと広くて、お洒落な部屋だった。

日当たりのよい南側はすべて窓になっていて、爽やかな初夏の日差しが入り込んでいる。窓の向こうは芝生で、ガレージ側からは見えなかったけど、庭の奥にはバーベキューなどが楽しめそうな野外コンロが置かれていた。

リビングダイニングは大きなワンフロアになっていて、赤色のパネルが鮮やかなアイランドキッチンが見える。そして、近くには白色のダイニングテーブルや、ふかふかしたソファ。天井は吹き抜けで、茶色の羽根をくるくると回す、大きなシーリングファンライトが設置されていた。

「素敵なお部屋ですね……」

——あれ、この掃除機……
感心した呟きを零しつつ、ふと、壁にかけてあるスティック型のコードレス掃除機が目がいった。

私はもう一度、注意深くあたりを見回した。日差しを避ける遮光カーテン。食器を収納する戸棚。キッチンの棚に収納された数々の調理道具。

「もしかして、ここにあるものはすべて、ハバタキユーズの自社製品ですか?」

「その通りです。よくわかりましたね」

リビングの真ん中で、鷹沢部長が腕を組む。

「やはり雛田さんは観察力があるし、ひと目で自社製品と見抜くほど、うちの商品を把握はあくしている。

普段から勉強しているのは知っていましたから、これくらいはわかるだろうと思っていましたよ」

「え、その、あの。別にそこまで言われるほどのことじゃないですけど……」

普段は怒られてばかりいるから、こんなに褒められると戸惑ってしまう。今日の鷹沢部長はなんだかいつもと違う感じがするけれど、気のせいかな？

「これからしばらくの間、あなたにはここに住んでもらい、ハバタキユーズの既存製品及び試作品を使用しながら生活してもらいたいです。いわば、テスターですね」

「……テスター？」

目を瞬かせて首を傾げる私に、鷹沢部長は頷いた。

「ハバタキユーズは、生活に要する製品を幅広く手がける製造メーカーです。つまり、いい商品を開発するには、実際の生活の中で製品を使用し、その使用感を緻密に調査する必要がある。私がそう提案しました」

「な、なるほど。だからテスター、ですか」

ようやく納得した。確かにハバタキユーズは生活用品メーカーで、その種類は多岐にわたっている。恐らく、庭にあるバーベキューコンロも自社製品なんだろう。うちはアウトドア製品や、カー用品、リネン製品など、生活に関するものはほとんど網羅している。

けれども、当然ながら商品数は莫大にあるもの、これといった大ヒット商品がある……というわけでもないのが、ネックだった。

経営は安定しているけれど、逆に言えば『安定しすぎている』せいで、今以上の利益が見込めな

い。だからこそ、私のようなテスターを用意して、もつといい商品開発に繋げようと鷹沢部長は考えたのだ。

「ふむ……。でも、どうして私が選ばれたんですか？」

もつともな質問をすると、鷹沢部長は眼鏡を押し上げる。

「ひとつは、あなたが開発部の中で一番適任者だったからです。入社時から開発部でアシスタント業務につき、様々なラフを凶面に起こしてきたでしょう？ あなたなら、製品の内部構造、コストと使い勝手の比率など、商品に対して様々な視点で見ることができると判断しました」

鷹沢部長が無表情のまま、淡々と説明する。顔つきは、普段私を叱る時とまったくかわらない。でも、話す内容が違った。

それって、鷹沢部長は入社当時から、私の仕事を評価してくれていたってことだね。……うっ、ちよっと、嬉しいかも。

「また、雛田さんは開発企画グループに一切関わっていないというのもよかったですね。一度人間関係に情が入ると、どうしても付度が発生しますから」

「あ、それは理解できます」

つまり、仲のよい先輩が開発した製品があったとしたら、他のものよりもよく見えてしまう。または、先輩に気を遣ってわざと高評価にすることもある。そういった理由でレビューの精査にブレが出てしまうことを、鷹沢部長は懸念しているんだ。

なるほどな。さすが部長。よく考えてるな。

「もうひとつ、理由があります。こちらは、前にあなたと面談した内容に関係します」
「えっ、もしかして、カレシがいるのかとか、好きな人がいるとか、あの……?」

やっぱりセクハラじゃなかったんだ。ちゃんと意味があつたんだ。もちろん鷹沢部長に限って、そんなことしないってわかっていたよ。

鷹沢部長が大真面目な顔で「はい」と頷く。

「私もここに住みますから。夫として」

「……………」

一瞬、彼がなにを言っているのか、わからなかった。

「……オット?」

鷹沢部長の言葉を繰り返して、首を傾げる。オット。といえば、オットセイ。ラッカセイ。ワツカナイ……いや、なんか違うな。

『夫、とは』と、頭の中で検索をかける。すぐさまピッと検索結果が出た。

【夫】……結婚した男女のうちの男。

「でえええええっ!?!」

頭の中で理解に至るまで五秒。

たっぷり考えた私は、改めてびつくり仰天ぎょてんの声を上げた。

「おっ、おっ、おっ、オットトトトって、どういうことですか!」

ズサツとうしろに下がって、問い質すた。

けれども、私の騒ぎに鷹沢部長は、眉ひとつ動かさなかった。なんとという鋼はがねの男! いや、こんな時くらいは私と同じくらいリアクション多めでお願いしたい。

「今回の開発企画のコンセプトは『家族で使う』。私が夫役、あなたが妻役としてこの家に住み、夫婦という共同生活の中で商品の価値を見つけ出したいのです」

言ってることは『なるほど』と納得できるところがあるけれど、それにしたって、ふ、夫婦ってなんですかね。あと共同生活ってことは、もちろん一緒に住むんだよね?

「ちよっ……ちよ、ちよ……十秒ください」

うしろを向き、腕を組んで考える。

……そうか。彼氏はいないのかとか、好きな人はどうだという質問は、このためにあつたんだ。確かに、彼氏なんていたらこんなことは頼めない。いや、寂しい独り身ならいいのかと問われたら、首を傾げちゃうけど。

でも、これは仕事だ。夫婦というモデルで生活し、既製品や試作品について公平かつ率直にレビューするのが私の仕事。開発プロジェクトの総合アシスタントとして指名されたからには、ちゃんとやり遂げたい。

なによりも、ずっと私を叱りしか続けていた鷹沢部長が、本当はちゃんと評価してくれていた。その結果、プロジェクトメンバーの末席に入れてくれたんだから、このご恩は仕事をすることで返したい。

「……………でもなあ……一緒に住むって……うーん……」

やっぱり心の声が口から漏れてしまう。だってこんな奇想天外な『仕事』。戸惑う反応が普通ではないのか。

私はチラッとうしろを見た。鷹沢部長はまったく表情を動かすことなく、私の返事を待っている。まあ、社内一ストイックと言われている部長だ。鋼の男だし、鬼侍とまで言われるほどの仕事人間だし、一緒に住んだからと言って危険はないだろう。

ふと、思い出すのは過去のこと。

けれどもすぐに首を横に振った。あれは終わったことだ。それに、『彼』は鷹沢部長じゃない。私は、学生時代に男性関係で辛いことがあって、それ以降、男性に苦手意識を持つようになってしまった。就職してからも、鷹沢部長はもちろん、社内の男性社員も苦手で、常に距離を置いている。仲良くなった同僚や先輩は、いずれも女性ばかりだ。

一時期は、それでいいと思ったこともあったけど……

やっぱり、このままじゃいけないって思う。過去のトラウマを乗り越えて、前向きに生きなきゃって、考える時もある。

だからこれは、私にとっても、チャンスなのかもしれない。

鷹沢部長は、一緒に住んだからといって、いきなり襲ったりするような人じゃないと、この一年間で理解していた。真面目で、誠実で、誰よりも厳しい。それが鷹沢部長だ。

私は恐る恐る振り向き、彼に尋ねてみる。

「一応確認ですけど、寝る場所は別……ですよね？」

「二階には複数部屋がありますから、好きな部屋を選んで頂いてかまいません」

「なるほど。あと、期間はどれくらいですか？」

「予定では二ヶ月です」

二ヶ月かあ。ちよつと長いけれど、シェアハウスと思えば、なんとかやっていけるかな。

「わかりました。二ヶ月、ここに住みながら自社製品を試し、使い勝手を評価していけばいいんですね」

「そうです。では、早速今週の土曜日、あなたの家に行きましょう」

「なんで私の家に来るんですか!？」

ふたたびズサツと体を引いた私に、鷹沢部長は『なにか問題でも?』と言いたげに片方の眉を上げた。

「仕事とはいえ、いきなり男とふたりで暮らすのですから、あなたのご両親も心配するでしょう?ですから、私が自ら説明に行きます」

「え、いえ、別にそこまでしなくても、さほどウチは心配性でもないの」

「そういうわけにはいきません。あなたは都内近郊にご両親と共にお住まいで、会社からも、この家からも、遠く離れているでしょう。そしてお宅は大根農家で、ひとり娘であるあなたを大切にしています。心配しないわけがありません」

「ちよつ……待。えっ?」

待て。なんでそんなに詳しいんだ。確かにうちは都心から離れたのどかな街にあり、会社までの

距離は電車を使って一時間かかる。そして家は大根農家で、私はひとりっ子だ。

パーフェクト上司・鷹沢部長になると、部下の個人データくらいは把握はあくしているのかな……。いつ何時なんとき、なにがあっても、即座に動けるように……とか。

うん。さすが鷹沢部長だ。

どっちにしても二ヶ月の間、別のところで暮らすことは両親に言わなければならぬ。鷹沢部長の説明を受けたら、両親も納得するだろうし、安心もするだろう。

「じゃあ、お言葉に甘えて、両親への説明をお願いします」

気を取り直した私が頭を下げると、鷹沢部長は眼鏡のツルを摘み、いつも通りの無表情で「わかりました」と頷いた。

第二章 現状打破のみだらな提案

なんだか勢いのままに決まっちゃった、私と鷹沢部長の期間限定同居生活。

ちなみに、私がいばらくの間テスターとして生活するのは、ちゃんと開発プロジェクトの概要に書いてあった。ただし、同居人がいることは秘されていたのだけど。だからプロジェクトメンバーの先輩達には『しっかりテストしてね!』と頼まれた。中には、評価の内容について、事細かに項目を設定するこだわり派の人もいた。

私の意見のみで企画が決まるわけではないけれど、私が『よい』と評価をすれば、それだけ企画が通りやすくなるのは確かだ。

よく考えると責任重大である。公平に、誠実に、そして正直にレビューしなきゃ。私個人の好みというよりも、大衆が使いやすいか、あるいは年齢別でシミュレーションしてみるのもいいかもしれない。

私なら、広い視点で商品を見ることができると鷹沢部長は言ってくれた。あの言葉にこたえるためにも、よく考えて評価しないとイケないね。

さて、驚愕きょうがくの日から二日経った約束の土曜日。

私は実家の最寄り駅で、鷹沢部長を待っていた。

今日、ふたりで実家に行くことは、両親には軽く説明してある。仕事で二ヶ月ほど別の場所で暮らすということ。上司と同居すること。そして、今日その上司本人が説明に来ること。

私の説明に、両親の反応は微妙だった。お母さんは口を開けたまま『へえ〜……』と相づちを打っていたし、お父さんはムスツとした顔でなにか考え込んでいた。

——やっぱり、男性と同居なんて反対なんだろうな。でも、これは仕事なんだし、同居者がどこから見てもストイックな鷹沢部長なら絶対大丈夫だろう。

ポケットからスマートフォンを取り出して時間を確認すると、午前十一時。そろそろ約束の時間だ。

部長には、駅前で待っていてほしいと言われたけれど……

私があたりを見回していると、しばらくして、一台の車が駅に近づいてきた。あまり目立たないけど、国産の高級車だ。見覚えのあるそれは間違いなく、鷹沢部長の車だろう。

私が近づいたところ、助手席のドアがカチャリと開いた。

「おはよう」

「お、おはようございます」

「車で君の家に向かうから、乗ってくれ」

「は、はい……」

おずおずと助手席に座ると、鷹沢部長は車を運転し始める。

うわ、鷹沢部長の私服姿、初めて見た。てっきりいつも通りのビジネススーツで来ると思ってい

たから意外だ。その姿は想像していたよりもずっと格好良くて、驚いてしまう。

初夏の季節に合った、白いリネンシャツ。軽く腕まくりした手首に嵌められたシルバーの腕時計は素敵なデザインで、いつもかっちりオールバックな髪も少しだけラフに崩している。

普段のスーツよりも薄着な姿は、鷹沢部長の無骨な体を浮き彫りにしていて、不思議な色気に溢れていた。

——なんだろう。初めて私服の鷹沢部長を見たからか、妙にドキドキしてしまう。体も熱くなってくる。こんなに格好良いだなんて、反則だ。いや、鷹沢部長は元の顔がいいから、当然私服姿も素敵だろうけど。

つて、そういうえば、鷹沢部長の意外な姿に圧倒されてそれどころじゃなかったけれど、今、敬語じゃなくて普通に話していた？

「あの……部長？」

「なんだ？ 今は勤務時間外だから、部長と呼ぶのはやめてほしいんだが」

「えっ、あ、すみません。じゃあ、鷹沢さん……」

「これから夫婦という設定でしばらく一緒に暮らすというのに、苗字で呼ぶのか？」

「ええっ!? じゃ、じゃ、じゃあ……なんとお呼びすればいいのでしょうか？」

会社で見ている鷹沢部長……いや、鷹沢さん？ と、口調も雰囲気も違いすぎて慌ててしまう。

確かに今日は休日だし、外で部長呼びはおかしいかもしれないけど、なんだかやけに押しが強いよな？

それに、私は鷹沢部長って呼ぶのが当たり前だったから、下の名前とか……覚えてない。
「稔、だ」

前を向いて運転をしながら、はつきりと、彼は名前を口にした。

「み……稔さん」

鷹沢稔。稔さん。

名前と呼ぶと一気に距離が縮まった気がして、恥ずかしくなってしまった。私、こんな調子で彼と同居なんてできるのかな。不安になってきた。

「君は雛田七菜。……七菜と呼んでいいか？」

「は、はい。い、いいですけど」

低く通る声で名前を呼ばれて、私の胸の鼓動はいつそう激しさを増す。

心の中がせわしなくざわめいて、私は戸惑いを覚えた。

——どうして？ こんな気持ち、初めてだ。

「七菜の家は、この国道沿いをしばらく走って、コンビニのある交差点を右に曲がり、小さな公園を通り過ぎた後、角を曲がった北側にあるんだったな」

「そそそそうですけど。なんでそこまで詳しく知っているんですか!？」

できる上司は部下の住所まで覚えているのか。……え、まじで？ 世の中の上司って、皆そんな感じなの？ そんなわけないよね!？」

「七菜は俺の部下なのだから、緊急時に備えて住所を把握するのは当然だろう」

当然。そつ、そつかー、やっぱり当然なんだ……

「部長って、すごいですね」

「このくらいは普通だ。さあ、ついたぞ」

ゆるやかに車が停まる。気づけば、車は家の前についていた。

私が住む街は、都内だというのにのんびりとしたスローライフな雰囲気あふに溢れている。都心から電車で一時間も走ると、東京とは思えないほどの田舎が広がっているのだ。

「車はどこに停めたらしい?」

「あ、どこでもいいです。このへんは全部うちの敷地なので」

農業を営む我が家は、自慢じゃないけど土地が広い。全体の八割が田んぼと畑なので、本当にまったく自慢にならないのだが。

我が家は曾祖父そうそふの時代に建てられた古い平屋だ。一応、ところどころ修繕を重ねているので住みやすくはなっているけれど、パッと見はともオンボロである。

だからちよつと恥ずかしくて、あまり稔さんは連れてきたくなかったんだけど、仕事だし仕方ないよね。

私は玄関の引き戸を開けて、声を上げた。

「ただいま」

「おかえり〜!」

廊下の奥からばたばたと足音が聞こえる。うちの玄関ホールはこれまた無駄に広くて、なんの

ためにあるのかよくわからない、松の木を磨き上げた大きな衝立が目の前にデーンと置かれていた。そして、飾り棚には木彫りの熊やら赤べこやら、曾祖父の時代から旅行先で購入した謎の置物がいっぱい並んでいる。

「いらつしやい。奥に入つてちょうだい」

やってきたのはお母さんだ。私は靴を脱ぎ、稔さん用のスリッパを用意する。

「お父さんもいるんだよね？」

「もちろんよ。それにしても……」

お母さんはまじまじと、玄関に立つ稔さんを見つめた。頭の前から靴の先までゆっくりと視線を動かして「はあ」とため息をつく。

「七菜……、あなたまた、すごい上玉を掴んだのね」

「上玉じょうぎゆうって言うな！」

「初めまして。七菜さんの上司を務めております。鷹沢稔と申します」

稔さんが深々と挨拶すると、お母さんは「まあまあ」と、両手を合わせてニコニコと微笑んだ。

「どうぞ、立ち話もなんですから」

「はい。失礼致します」

靴を脱いでスリッパに履き替えた稔さんを連れて、母の先導で廊下を歩く。やがて居間の扉を開けると、父が畳の上ののっしり座っていた。

一見すると厳つい人である。体が大きくて、ゴリラみたいな人だなあと子供の頃から思っていた

父親だ。とてもパワフルで、米俵こめわらくらいなら片手で持ち上げてしまう。

趣味は筋トレ。そして毎週末、街の消防団長として夜間パトロールをしている。

そんなお父さんは、ギロリとこちらを睨んだ。

——えっ、もしかして、怒ってる？ 今回の同居仕事について、まさかの大反対とか……？

こんなに怖い顔をしたお父さんは初めてで、私はおずおずと畳に座った。

隣に稔さんが正座をして、手に持っていた紙袋からふたつの品を取り出して目の前に置く。

「初めまして。先にお近づきの印として、こちらをお納めください。日本酒と鯖寿司です」

「むっ……!?!」

お父さんの目がギラリと底光りした。そして早速、日本酒の箱を開ける。

「こ、これは……! 俺がこの酒が好物だと知って、わざわざ取り寄せてくれたのか!？」

「はい。淡麗たんれいかつ辛口の地酒が好きだとお聞きしました。お母様は、鯖寿司さばがお好きだそうで、こちらは京都から取り寄せた一品になります」

「まあ！ 有名な料亭の鯖寿司じゃないですか。わあ、ありがとうございます！」

両親はあっさり稔さんを買収されてニコニコした。半端なくちよろいよ、両親！

それにしても、私は一言も稔さんに両親の好みなんて話してないけど、どうやって知ったんだろう。部長クラスになると、部下の両親の好物を把握はつかくしておくのも常識なのだろうか。

「本日は突然お邪魔してすみません。七菜さんから話は聞いていますですが、まずは私から説明をさせていただきます」

稔さんはきつちりした正座を崩すことなく、真面目な顔で話し始めた。

「実は、私の父はハバタキユーズの社長をしております、私も将来は父の跡を継ぐべく、今は開発部の部長として日々勤しんでおります」

「まあ……社長の息子さんだなんて、すごいですね」

お母さんが目を丸くして驚いた。私もぼかんと口を開けて、隣に座る稔さんを見上げる。

——前から社長子息って噂は聞いていたけど、やっぱり本当だったんだ。

うーん、ますます仕事とはいえ私なんかが同居しているのかなと思うんだけど……

「それで、今回の業務内容につきまして、今よりも素晴らしい商品を開発するために、七菜さんには商品テスターとして私と夫婦という体で共に暮らしてもらいます。七菜さんには快適な毎日を送ってもらえるよう、私は努力を惜しまないつもりです。どうかご許可を頂けないでしょうか」

稔さんは会社でいつも見ている真面目な顔つきで、まっすぐに両親を見つめた。

両親はお互いに顔を見合わせ、こくりと頷き合う。

そしてお母さんがニッコリと笑って、パンと手を叩いた。

「もちろん、こちらはかまいませんよ。むしろ、どうぞどうぞって熨斗つけてあげちゃいたいくらいです！」

「お、お母さん、そこまで言う!?」

私が慌てて非難すると、腕を組んだお父さんが厳かな口調で言った。

「どうせなら、そんな契約じみた話でなく、本物の夫婦を目指してくれてもいいくらいだ」

「お、お父さんまで、なに言ってるのー!?」

—— けっ、結婚を前提とか。本当にやめてほしい。なんでそんなに乗り気なのだ。

「だって大企業の社長子息なんて超優良物件じゃない。しかも、とても真面目で誠実そうなお方だわ。七菜がこんな人を連れてきたのなら、手放して喜ばないほうがおかしいでしょ? ここでゲツトしない手はないわ!」

「本人を前になに言ってるのー!? 仕事! これは仕事だから。夫婦っていう設定で商品をテストするだけなの!」

「いいじゃないか。仕事は仕事としてしっかりやりながら、ついでに愛も育んだら。稔君はまさにカモがネギしよってきたような男じゃないか。うまくすればコレも期待できそうだし」

「お父さん、指でマルを作らないで! 品がなさ過ぎるからー!」

もうヤダ。うちの両親は終始こんな感じで調子がいいから、稔さんは連れてきたくなかったのだ。いい意味でも悪い意味でも庶民的だし、基本的に雑草根性というか、言い方を変えると大変あつましいので、洗練された世界に住んでいそうな稔さんとは徹底的に相性が悪いと思う。いや、こういう風に明るくてなんでも話してくれる両親だからこそ、私も救われてきたところはあるんだけど。

稔さんは、私達親子の騒ぎをずっと黙って見ていた。やがて、ゆっくりと口を開く。

「それでは、せっかくなのでお言葉に甘えさせて頂きます」

「えっ?」

私は思わず稔さんに顔を向けた。彼は平然とした顔つきで、眼鏡のフチを光らせる。

「これからの二ヶ月の同居は、結婚を前提とした、期間限定の夫婦生活とさせていただきます。そのほうが、私としても話が早くて助かります」

「なななな、なにを言ってるのですか、稔さん!」

両親に感化されて、稔さんまでおかしくなってしまったのだろうか。私が『気を確かに持って!』と、稔さんの目の前で手をヒラヒラ振ると、その手首をグツと掴まれた。

「好きだ。ずっと前から君が好きだったから、問題はまったくくない」

「……………」

茫然と、稔さんを見つめる。向かいでは両親が「ビュービュー」とか言ってるけど、まったく頭に入ってるこない。

「ずっと、どうやって君に想いを告げようか悩んでいた。こんな俺では好きになってももらえないだろうと。しかし、ご両親が前向きに考えてくれるのなら、俺も考えを改めたい。七菜、どうか俺の気持ちを受け入れてほしい」

「う、受け入れろって言われても、こ、困ります。私が…好き、だなんて嘘でしょ? だって、入社してからずっと……………」

私は困惑して俯いた。

稔さんは、基本的に誰に対しても厳しい人だけど、私はとにかく、なにかあるたび稔さんに怒られていた。

凶面がちゃんと引けていないとか、ミーティングの議事録が不十分だとか。とにかく頻繁ひんぱんに注意

されていて、いつも同僚や先輩になぐさめてもらっていた。だから私はずっと稔さんに嫌われているんだと思い込んで、落ち込んでいたのに。

なぜだ。どうして? ああもう、全然話についていけない!

「七菜、難しく考えなくていい」

「そう言われても」

私の手首を握ったまま、稔さんが言葉を続けた。

「この機会に、君も俺のことを考えてみてほしいんだ。試用期間だと思って、俺が君の夫にふさわしいかどうかを、試してくれ」

「そ、そんな、自分を試作品みたいに言わないでくださいよ〜!」

私の絶叫にも似た非難の声は、儂はげくも初夏の風と共に流されたのだった……



なんだかよくわからないうちに、えらいことに巻き込まれてしまった気がする。

ぼんやりと会社のデスクを見つめて、私は長いため息を吐いた。そうして、この一週間のことを思い出す――

私の両親への挨拶あいさつという大イベントが、台風のように過ぎ去った次の日、早速私の引っ越しが始まった。

そして私の私物は一切合切、あのモデルハウスのような家に移動させられて、心の準備もないままに稔さんとの共同生活が始まってしまったわけだけ……

「そうは言っても、いきなり夫婦らしくなんて、無理だよね」

ぼつりと吹き、仕事の続きを再開する。

——あれは、共同生活開始、一日目のことだった。

朝、実家ではない真新しいベッドで目覚めた時は、なんとも言えない違和感が満載だった。すべての事象が早送りのように進んでしまったせいで、自分の脳が、まだ現実を受け入れていなかった。ボンヤリしながら一階に下りて、あくびをしつつリビングの扉を開けたら、そこではビシッと髪を整え、パリッとビジネススーツを着ている稔さんが、コーヒーを淹れていた。

『おはよう』

その一言で、急激に目が覚めた。

『朝食は和食にしたが。コーヒーは食前と食後、どちらに飲む？』

『あ、あ……あ？』

語彙力が一瞬で破却された私は、自分のぼさぼさの髪とノーメイクの頬を交互に触った。

『君は寝る時、パジャマを着るんだな。いちご柄が、とても似合っている』

『い、ちご……』

私は髪を掴んだまま、自分の着ている服を見た。赤いいちごがたくさんプリントされた白いパジャマ。

『……！ ちよつ、ちよ、ジャストアモーメントー!!』

私は瞬時に胸を腕で隠し、ぼたぼたとリビングから逃走した。

なんてことだ！

パジャマ姿を見られたのも、ノーブラなのも、メイク前のすつぴんなのも、髪をセットしていないのも、なにかもが恥ずかしい。全日本羞恥心選手権があったら、間違いなくトップに躍り出るレベルだ。

ふたり暮らしていることは、そういうことなんだと、ようやく私は理解した。こういう姿を見られるのは、両親ならなんでもないことだけど、相手が稔さんなら話は別だ。

これはもう、朝からまったく気が抜けない。

ちなみに、稔さんが作ってくれた朝食はめちゃくちゃ美味しかった。温かいあさりの味噌汁に、ふわふわのだし巻き玉子。香ばしい焼き鯖に、サラダまで。文句なしの百点満点である。

それに比べて私は、朝から家事らしいことをなにもしていない。せいぜい食器を食洗機につっこんでボタンを押したくらいだ。

ハバタキユーズの社長子息で、仕事が完璧にできて、頼りがいがあったて、お顔が素敵で、スタイルもよくて、料理が上手って、どんだけパーフェクト超人なのだろう。

ご飯が美味しすぎて、無言で食べきってしまったけど、ちゃんと『美味しい』って言えばよかった。言うタイミングを逃したまま出勤時間になってしまって、そんな日々をもう一週間も過ごしている。淡々と、淡々と、会話らしい会話もなく。

「このままじゃ、いけないよね……」

チヲ、と横目で部長席を見る。今日、稔さんは会社にいない。朝礼を終えた後、製造工場のある地方に出張したのだ。日帰り、帰りは駅から直帰するらしい。

このままではいけない。

ずっと思っていたことだ。このままだと、まったく仕事にならない。

私の仕事は、あの家にある生活用品について夫婦で使う想定でレビューすること。今週末には、ある程度の報告書を提出しないといけないし、そのためには、稔さんと夫婦として協力し、意見を申し合わないといけない。

いつまでも緊張していたらダメだし、怖がっていてもダメだ。

それに私は決めたじゃない。稔さんと一緒に暮らすことで、男性への恐怖心を克服しようって。自分が変わりたいと思ってるんだから、ちゃんと向き合わないと。

「そうだよ。ちゃんと話し合わなきゃ」

相手は鬼侍だし、見た目はすごく怖いけど、誠実そうだし、なにより真面目だ。

「それにすごく格好良いし、スーツ姿が似合って、家で上着を脱いだネクタイとワイシャツ姿とか、めちゃくちゃ色っぽくて……ううっ」

稔さんの、あの姿を思い出すと、いつも胸の鼓動が激しくなる。慌てて首をぶんぶん横に振って、彼の姿を頭からかき消す。

会社でも家でも基本的にきっちりしている稔さんだけど、やっぱり家に帰ると少しは気持ちが

ラックスするのか、心なしか表情がゆったりしている。その、ほんの少し疲れたような、気の抜けた顔には非常に色気があって、私は直視できないほどドキドキしてしまうのだ。

男性と一緒に暮らすというのが、こんなにも気が臭じやないなんて！

全然知らなかった……。一応これでも、過去に男性とつきあったことはあるのに、あの頃は全然そんな気持ちにならなかった。

ということは、やっぱり稔さんが特別なの？

そう考えた途端、冷めかけていた熱がふたたびぐんぐんと顔に上がって、デスクに肘をついて頭を抱えてしまう。

そんな。気のせいだ。だ、だって、まだ一緒に暮らして一週間だし！

でも、稔さんは……私が好き……なんだよね？

「いや、それが一番謎なんだけどー」

ぶつぶつ、ぶつぶつ。

今日はやけに独り言が多い。悩みが多いからだな、うん。

とにかく。いつも美味しい朝食を頂いているのだから、今日くらいは夕食は私が作ってお返ししよう。そして今後のことについて、ちゃんと相談しよう。

相手は鬼でもモンスターでもない。言葉が通じる人間なんだ。

我ながらすごい無理矢理な納得のしようだと思いつつ、私はいつも通りの雑務を片付けるのだった。



終業時間のチャイムが鳴って、自分のデスク周りを片付ける。同じように帰り支度を始める同僚や先輩に挨拶して、私は足早に会社を後にした。

うちの会社は基本的に私服で、制服はない。男性社員はビジネススーツが圧倒的に多いけど、女性社員は割と好きな服を着ている。さすがに奇抜な服の人は少ないが。

今、私が着ている服も、白い襟シャツに、ベージュのスキニーパンツというシンプルな装いである。こんな感じでも許されるのは、ハバタキユーズのいいところかもしれない。

まあ、噂によると、めちゃくちゃファッションチェックが厳しくて、女性同士のマウント争いが激しいという地獄みたいな部署もあるそうだけど……少なくとも開発部は平和である。きつと、そういう不毛な諍いを許さない雰囲気満載な稔さんが部長だからだろう。喧嘩するヒマがあるなら、企画のひとつでもあげてください。とか、冷徹に言いそう。

家に帰るのに、実家だったら一時間かかっていたけれど、今住んでいる家は電車に乗ってひと駅。会社に近いのは純粹に嬉しい。

家に帰る前に、駅前のスーパーに寄る。

そういえば、稔さんはなにが好きなのかな？ あの調子だと好き嫌いなんてなさそうだけど。逆に、そんな可愛い弱点でもあったらいいのに。

ま、私の作れる料理なんて大したものではない。稔さんの作る朝食より大分グレードダウンしちゃうけど、そこは我慢してもらおう。

世の中には、私のようにあまり料理しない人間でも、なんとか人並みに作れる便利なものがたくさん売っている。

そのひとつがこれ！ 炒めた野菜とお肉にかけるだけで本格中華料理ができあがる、魔法の液体！ 調味料などが全部袋に入っているので、計る必要もない。パッケージの裏面に書いてある通りに作ればOKというしろもの。

お味噌汁くらいなら作れるので、オーソドックスにワカメと油揚げにしよう。それから副菜にはなにがいいかな。メインが中華だから、春雨サラダなんて合いそう。これも簡単だし、材料さえ買えば大丈夫だ。

必要なものを買って揃えて、家に向かう。すでに合鍵をもらっているんで、私は玄関の鍵を開けて中に入った。

「ただいま……って言っても、誰もいないよね」

実家なら家族がいる。台所から美味しそうな匂いが漂って、お母さんが「おかえり〜」って出迎えてくれる。でもここには、私と稔さんしかない。

「うー、本当に大丈夫かな。やっぱり私、大変なことをしてかしている気がするよ……」
男性とふたり暮らして初めてだし、どうしても緊張してしまう。

だ、だが。仕事だもん。頑張らないとね。

先日稔さんに言われた『七菜が好きだ』という爆弾発言は、後で本人に問い詰めるとして、まずは夕食を作ろう。

「そうだ。どうせだから、試作品や既製品も積極的に使ってみよう」

そもそも、そのために住んでいるんだしね。

キッチンには、ハバタキキューズ製の調理道具が揃っている。私は野菜のカットに自社のチョップパーを使ったり、新製品のフライパンやトングで料理を作った。

そして炊飯器が炊き上がりのアラームを鳴らした時――

「ただいま」

稔さんが帰ってきた。リビングの扉が開いて、ビジネススーツ姿の彼が現れる。

「おっ、おかえりなさいっ」

ぴっと背筋を伸ばして、緊張しつつ声をかけると、稔さんは私をジッと見て頷いた。

「夕食を作っていたのか」

「ハ、ハイ。たいしたものは……っ、つくってない、ですけど」

しゃもじを両手で持って、たじたと答える。

――ああもう、怖がつちゃダメなのに。やつぱりコワイ。立つてるだけで無視できない威圧感があるし、顔は無表情だし、眼鏡をかけた目は余計に冷たく見えてしまう。

「着替えてくるから、少し待ってもらえるか？」

「だ、大丈夫です。はい」

ぎくしゃくと頷き、ふたり分のお茶碗を戸棚から取り出す。

――うう、緊張するなあ。ずっとこの調子だったら本当に困る。

私がお茶碗にごはんをよそい、お味噌汁を椀に入れた頃、二階で着替えを済ませた稔さんが戻ってきた。

「中華料理か。七菜の料理は凝っているんだな」

「ちがっ！ ちがうんです……これはその、半分レトルトみたいなお料理で……」
エプロンの裾を握って説明する。

「私、料理はそんなに得意じゃなくて、稔さんの朝ごはんみたいな立派な料理は作れないんです。せいぜい、材料を切って炒めたり、混ぜたりするくらいなんです」

なんだか言って情けなくなってきた。もっとお母さんのお手伝い、積極的にするべきだったなあ。いや、もっと言えば料理教室でも通つとけばよかったかも。

私がへこんでいると、頭にぼん、となにかがのせられた。思わず顔を上げると、それは稔さんの大きな手だった。

どきん、と大きく胸が高鳴る。

乾いた手は、優しく私の頭を撫でて、それがあまりに気持ちよかったせいかわ、緊張していた肩の力がゆっくりと抜けていった。

「そんな顔をするな。君は俺のワガママに巻き込まれているだけなんだから」

「稔さん……」

「夕食、頑張って作ってくれてありがとう。俺には、とても美味しそうに見える」

「は、はいっ！ それはもう、絶対美味しいですよ！ だって半分レトルトですから！」
レトルト食品の味に失敗はないのだ。多分。

私がごぶしを握って自信満々に言うと、稔さんの眼鏡の奥にあるつり上がった目尻が、ゆつくりと下がった。

そして、思わずといった様子で、口の端はしをくつと上げる。

「あれ……もしかして、今、笑いましたか？」

「ああ。七菜がとても可愛かったので、つい笑ってしまった」

かわっ……!?

今なんか稔さん、さらつとすごいこと言わなかった!?

自分の顔に、かーつと熱が上がっていく。

「と、と、とりあえず、冷めないうちに食べましょう。わ、私から、ちょっと、稔さんに相談したいこともありますし……」

「ああ、わかった」

大きなダイニングテーブルに、私と稔さんは向かい合わせになって座る。そしてお互いに手を合わせて「いただきます」と食べ始めた。

「うん、美味しい。この春雨はるこあめのサラダは君の手作りなのか？」

「はい。それは混ぜるだけですし、野菜はハバタキユーズのみじん切りチョッパーを使って調理し

てみました」

「ああ、使ってくれたのか。使い勝手はどうだった？」

「切るのが早く済むのはとてもいいんですけど、刃の付け替えがちょっと面倒なのと、使い終わって刃を外す時、手が切れないように注意するところが気になりましたね」

「ああ、そこは開発当時から声が出ていたんだが、コストの問題で諦めざるを得なかったんだ。もう少し刃の着脱がスムーズになると使いやすいかな」

ふむふむと稔さんは頷きつつ、もぐもぐと春雨はるこあめサラダを食べる。

「朝、キャベツをカットする時に同じチョッパーを使ったんだが、俺が使うのと、君が使うのでは、まったく感想が違う。やっぱり、七菜と一緒に住んでみてよかった」

満足そうに言って、次に味噌汁を飲む。

「美味しい。七菜は料理が上手だな」

「ええっ!? そ、そんなことないですよ。た、単なる味噌汁ですから」

唐突な褒め攻撃に焦りながら、私も味噌汁を飲んだ。……うん、なんの変哲もない味噌汁だ。褒め要素なんてひとつもない。出汁だしだって、粉末和風だしを使っているし。

「そんなことはない。七菜の料理には可愛げがある。味気ない俺の料理とは、まったく違うぞ」

「かわいい……げ？」

可愛げがある料理なんて言われたのは初めてだ。それは褒めているのだろうか？

「更に行くなら、優しさや温もりもある。俺には縁のなかったものだから、新鮮で……、嬉しい。」

七菜の作った料理を食べられるなんて、世界で俺以上に幸せな者はいないだろう」

「へっ……」

ぼろりと箸が落ちた。

無表情で、淡々と、なにを仰おしやっているのか!?

もぐもぐとおかずを咀嚼そじやくした稔ねさんは『どうかしたか?』と言いたげに首を傾げている。

——まっ、まさかだけど、稔さんって、もしかして天然さんなの?

自分が口にした言葉がどれほどの破壊力を持っているか、まったく自覚していないんだ。

私の顔は真っ赤になっているだろう。だって、私の料理が優しいとか、温もりとか、幸せだとか、嬉しいけど、嬉しいけど、こんな半分レトルト料理で、そんなこと言われても困る!

これがイヤミだったら、どれだけマシだろう。けれども、彼の誠実な性格から、そんなことを言うとは思えない……ということは、本心なんだ。

——うう、嬉しいけど、恥はずかしい。私、もっとお料理頑張らなきゃ……

「七菜は確か、辛い料理が苦手だろう。中華料理は大丈夫なのか?」

「あ、それは料理によります。今日作ったみたいなの甘酢あんかけは大丈夫なんですけど、麻婆豆腐マボドウトウフとか、担々麵タンタンメンとかは苦手なんです」

顔が上がった熱で、てんてこ舞いになっていた私は、慌てて答える。

「なるほど。甘党の七菜らしい答えだ。今朝、俺が作った卵焼きの味はよかったか?」

「はい! 甘めの味付けで、とっても美味しかったです。そうそう、私、ちゃんと稔さんに美味し

いって言ってなかったたので、今言えてよかったです」

私が笑顔で言うと、稔さんは目を細めて微笑んだ。

ドキン。

胸が大きく高鳴る。

稔さんの笑顔って、本当に素敵だ。優しく、穏やかで、頭の中がほわほわ小春日和こはるびよりになってしま

まうような、癒いやしがある。

会社では常に無表情だから知らなかった。こんな笑顔を隠し持っていたなんて、なんだかもつたいない。でも、私しか知らない……と思うと、胸の鼓動がばくばくと、いっそう強く音を立て始めた。

息苦しいくらい。どうして? 私……稔さんの一挙一動に動揺している。

……ん、でも、ちょっと待って? どうして稔さん、私が辛いのが苦手だとか、甘党ってことを知っているんだろう。そんなこと、話したことはないのに。

自分の心を落ち着かせるためにご飯を食べて、咀嚼そじやくする。

半分レトルトの中華あんかけを食べて、首を傾げた。

「どうかしたか?」

「あ、いえ、なんでもありません」

味噌汁を飲んで、首を横に振る。きつと、私の食の好みは、先輩や同僚から話を聞いたのだろう。

私達は滞とどりなく食事をして、一緒に片付けをした。自社製の食洗機もあるし、稔さんも手伝

てくれたので、あつという間だ。ついでお風呂も掃除して、お湯を溜める。

さて、そろそろちゃんとお話をしなきゃ。

「み……稔さん！」

「なんだ。風呂は先にどうぞ」

「あ、ありがとうございます。じゃなくて！ あの……ちよつと、相談があるんです！」

脱衣所で、ボンとバスタオルを渡された私は、慌てて話す。

「相談……。ああ、君が普段使っているシャンプーのことか？ それなら、ある程度買い置きをしているぞ。確か、このメーカーを使っているんだったな？」

「そうです。このシャンプーとコンディショナーのセットが一番私の髪に合うんですよね……でもなく！ っていうか、なんで私が愛用しているシャンプーを知ってるんですか？」

さすがにそんなことまで同僚や先輩には話していいない。

すると稔さんは、少し困ったように目を伏せた。

「そうだな。さすがに気になるか。やはり説明するべきだな」

「いえ、それよりも先に私の相談を聞いてください。仕事のことなんですから」

仕事、と言うと、稔さんはスツと姿勢を正した。さすが仕事人間の部長である。纏う雰囲気もピリツと引き締まった。

「では、リビングで話そうか」

「はい」

稔さんの先導でリビングに戻ると、彼はキッチンに立つて湯を沸かし始めた。

「ソファに座って待っていてくれ。紅茶を淹れよう」

「あ……お気遣いくださり、ありがとうございます」

リビングの南側には、ゆったり座れるソファがある。そこに腰掛けると、しばらくして稔さんが紅茶の入ったティーカップをふたつ、盆にのせてやってきた。

「熱いから気をつけるように」

「はい。……これって、もしかしてロイヤルミルクティーですか？」

「ああ。好きだろう？ 角砂糖を三つ入れてあるが、もつと甘くしたいのなら、足すといい」

盆の上には角砂糖が入ったガラスボトルも置いてあった。

甘さはこれでちょうどいいけど、どうして私がロイヤルミルクティーが好きなのを知っているんだらう？

うーむ。なんだか稔さんって、めちゃくちゃ私のこと知っている気がする。できる部長は洞察力が半端ないのだろうか。私のデスクに、よくロイヤルミルクティーのペットボトルを置いてるところを見られていたのかな。

「それで、相談とは？」

「あ。えつと……どう言えばいいのか、自分でもよくわかっていないんですけど——」

頭の中で言葉を選びつつ、私は説明を始めた。

「なんだか勢いのままに始まってしまった共同生活も一週間が過ぎましたが、正直言って私達、夫

婦って感じ、全然しないですよね？ もっとも、そういう設定なだけですけど……。こんな状態できちんとテスターとしての役目を果たせるのか心配になっていました」

甘いミルクティーを飲んで、俯く。

そう。私は、夫婦ってというのがどういうものか、まったくわからない。単なるシェアハウスと、夫婦として暮らすのは、どう違うんだろう？

「それに、実を言うと私、稔さんがちょっと怖いんです。あ、稔さんだけが怖いんじゃない、全体的に男性が苦手として」

稔さんを傷つけないようにフォローしつつ、優しいベージュ色のロイヤルミルクティーを見つめた。

「あの、前にうちの実家で、稔さん、私のことが好き……とか、言っていましたよね？」

「ああ、言った」

「改めて聞きますけど、冗談……じゃないですよ？」

顔を上げると、隣に座る稔さんが、じっと私を見つめていた。

「冗談に聞こえたのなら申し訳ない。もっとしっかりと自分の想いを伝えるべきだったな」

「い、いえ、稔さんが冗談を言うような人だなんて思っています。でも、理解が追いつかないと言いますか？」

首を横に振って否定してから、私はゆっくりとロイヤルミルクティーを飲む。

甘い。私好みの甘さだからかな、少しだけ心が落ち着く。

「私、ずっと、稔さんには嫌われているって、思っていたんです」

好意を向けられているなんて、まったく感じなかった。同僚や先輩に慰められるくらい、稔さんは、いや、鷹沢部長は、私に容赦なかった。

「私がどんくさくて、仕事が遅くて、しかも満足な完成度できないから、稔さんを苛立たせているんだって。開発部に向いてないのかな……って考えていたんです」

「七菜、それは違う。違うんだ」

稔さんが、カップを持つ私の手首を掴んだ。ちゃふんとロイヤルミルクティーが波打つ。

「始めから話そう。君が開発部に配属された日、俺は君を見て、衝撃を受けた」

「しよ、衝撃」

そんな風に言われたのは初めてだ。

昔、ひとりだけ男性とつきあったことがあったけれど、その人には『君、可愛いね』と声をかけられたんだっけ。今思うと、出会った女性皆に同じ台詞を言っていたんだらうな。

「実は、俺は今まで、あまり女性に興味を持つことができなかった。恋愛感情が理解しがたく、俺の情熱のすべては仕事——商品開発に注がれていたんだ」

それは、なんとなくわかる。

だって稔さんの商品開発に対する気迫って、まさに『鬼侍』だもの。使いやすさとコストパフォーマンスの追求という信念がひとつもぶれることなく、ストイックかつ妥協を許さない。そんな稔さんの努力は常に売り上げという形で結果を出し、大きな数字をたたき出している。その下で

働く私達開発部は、毎日ひいこらと必死で部長についていつているのだが、それくらい稔さんの仕事にかける熱意はすごい。

「だが、七菜に出会った瞬間、頭の中で雷鳴が轟いた」

「雷鳴が、轟く」

「初めての感覚だった。俺はおかしくなったのかと焦った。七菜の可愛らしい顔や、守りたくてたまらなくなる小柄な姿、ふわふわと揺れる髪、すれ違った時の匂い、はきはきと一生懸命しゃべる声、初めての仕事でも必死に覚えようとする努力家なところ、君のさりげない仕事すべてが、俺に衝撃を与え続けた。動悸は激しさを増す一方で、仕事もそこそこに君のことを考えてしまう。こんなこと、今までになかった」

今の長い台詞を一呼吸で言い切った稔さんに、私は若干体を引いた。

「は、はい」

「七菜を知りたいという好奇心が止められない。俺の興味は仕事だけだったのに、君が一番気になった。だから俺は……」

私の手を掴んだまま、稔さんの冷たい瞳が底光りする。めちゃくちゃ怖い。

「――七菜の研究を始めたんだ」

「けんきゅう？」

はてな、と首を傾げる。七菜の研究ってなんだ。私を研究していたということ？

「研究テーマは『なぜ俺は雛田七菜に惹かれるのか？』だった」

「タイトルまであったんですね」

我ながら間の抜けたコメントをしてしまう。だって、それ以外に言葉が思いつかない。

稔さんは、厳かに頷く。

「七菜のグッズである家族から調査を始め、君の生い立ち、体形の寸法、嗜好と苦手な食物、愛用の日用品、思いつく限りの個人情報を集めたんだ」

「え」

自分で出したとは思えないくらい、低い声が出る。

こ、これは、わりとドン引き案件？

「しよっ、しよしよしよ、しよんなことをしていたのですか？」

戸惑いのあまり、うまくしゃべれない。

ていうか、原因はそれか！うちの実家の住所を把握し、両親の好みを掴み、私が辛いものが苦手で甘党だとか、愛用しているシャンプー、コンディショナーのメーカーとか、ロイヤルミルクティーが好きだとか。全部、その『研究』の成果だったのだ。

えっと、これは怒るべきか、それとも感心するべきか。

あまりに驚きすぎて、見当違いなことを考える。

「七菜に気づかれないように後をつけるのは、あまり苦労しなかった」

「まったく気づきませんでしたよ……っていうか、それストーリー行為ですよね？」

「結果を見ればそうだな」

まさかの開き直りですか!? ストーキングを認めるストーカーなんて初めて見た! しかもなぜか堂々としていて、ちっとも罪深さを感じていないところが逆にすごい!

「時に、君はもう少し周りに注意したほうがいい。女性である上、通勤に一時間もかかるというのに、警戒心がなさ過ぎる。後をつける俺のほう心配したくらいだ」

「ストーカーから注意を受けてしまう日がくるなんて……」

がっくりと肩を落とす。これからは周りに気をつけよう。どこに稔さんが潜んでいるかわからないし。

「だが、かき集めた七菜のデータを検証しても、まだ俺には七菜に惹かれる理由がわからなかった。どうしてこんなにも君が気になる? 君が特別だからか? では、なにが特別なのか。今まで向けていた情熱を、どうしてすべて君に向けてしまうのだろうか? 俺は一週間ほど考え続けた」

「はあ、一週間も……お疲れ様です……」

もはや怒る気も失せてしまった。どんなことにも真面目で、一切の妥協を許さない人なんだな、きつと。ストーキングはさすがにやめてほしいけど。

「七菜が、可愛い」

「……え、はい、ありがとうございます」

「目が離せない。君の一挙一動に魅力を感じる。昂ぶる性欲が留まることを知らない」

「あ、はい。……え?」

なんか今、すごいこと言わなかったか。性欲?

「そんな想いを悶々と抱き続けて、ようやく理解したんだ。『可愛い十守りたい十倍にいたい』×性欲=恋愛感情』そう、答えを得た。俺は君に恋をしていたんだ!」

一息で言った言葉に、目がテンになる。

口が大きく開いて、ポカンとした。

ええと、恋って、そういう風に自覚するものだった?!

なんかもつとこう、ホヤホヤ〜として、ボンヤリ気づく的な。少なくとも、こんな風に個人情報を集めて検証したり、方程式みたいに言葉をはめ込んだりするものではないと思うのだけど……

「七菜、君が好きだ」

両手で私の肩を掴み、稔さんが真剣な表情で告白する。

私は言葉が出ず、目を見開くばかりだ。

「俺は君を生涯の伴侶にしたい。ここまでの感情を向けられるのは、生涯において七菜以外にいないと確信したんだ。ゆえに俺は、この契約同居計画を実行に移した」

なるほど……契約同居計画……んっ?

「そそそそ、それってめちゃくちゃ職権乱用じゃないですかっ!! 涼しい顔して公私混同過ぎますよ!?!」

「もちろん、七菜に商品や試作品の評価をしてほしかったのも事実だ。この計画は、そもそも君が真面目に仕事に打ち込む姿勢や、正当にレビューできる誠実さがあると確信したからこそ、思っていたのだから」

ようするに『私ならこういう仕事が任せられる十自分の恋愛を成就させたい』夫婦設定で期間限定同居の提案』ってことか。って、稔さんの考え方が私にも移ってるー！

「君は先ほど言っていたな。俺が君を嫌っていると思っていた、と」

「あ、はい。そうですね……」

正直、個性的すぎる告白やらストーカーのカミングアウトやらで、その件はわりともういいかと思いかけているけれど……

「実は、君を好きになりすぎて、あらぬことを口に出してしまいそうだから口数を減らしていたんだ。君の可愛い失敗なんて目を瞑りたくなくなったし、質問された時は、密室に連れ込んで手取り足取り教えたくなった。だが、それはいけないことだと自分を律したあまり、必要以上に厳しくしてしまった。結果、君が落ち込むほど追い詰めてしまっていて、すまなかった」

ぺこりと稔さんは頭を下げた。本気で悪かったと謝罪しているのだろう。

しかし私といえば『よかった……密室に連れ込まれなくて……』と、むしろ安堵しているので、謝られても複雑なところだ。

でも、なるほどなくと、納得せざるを得ない。

ずっと稔さんが私に厳しかったのは、彼の気持ちの裏返しだったのだ。恐らく鋼の意志で自分を律していたのだろう。だって、私はもちろん、同僚も先輩も稔さんの想いに気づいていないはずだ。皆して『鷹沢部長は雛田さんに特別厳しいよね』って同情してくれていたもの。

でも、ひとつだけ言えることがある。私はロイヤルミルクティーを飲みきって、カップをテーブル

ルに置いた。

「確かに、私は毎日のように注意されて、人事部に相談しようかなってくらいには落ち込んでいましたけど、私情で最悪されるよりは、厳しくてよかったですよ」

「そうなのか？」

「はい。だって、稔さんの指摘は全部正しかったし、厳しさがあったからこそ、私もある程度の仕事ができるようになったんだと思いますから」

「七菜……」

稔さんが、ぼうつとした様子で私の名前を口にします。

そして、額に手を当て「くっ」と辛そうな声を上げた。

「なんてけなげなことを言うんだ。可愛すぎて性欲が湧き上がる」

「性欲!？」

「恋をする人間は大変だな。こんな欲望を理性で抑えつけないならならぬのだから」

「なんか苦悩してますけど、普通の人間と稔さんはちょっと違うと思います」

私は正直に今の気持ちを口にした。どっちかと言えば稔さんは変な人だと思う。そんな事実、知りたくなかった。きつと会社の中で私くらいしか知らないだろう。切ない。

「と、とりあえず、稔さんの気持ちはわかりました！　そして、この仕事上の同居が実は私利私欲にまみれていたことも、理解しました」

「私利私欲。うん、的確な表現だな」

「自分で言わないでくださいっ！ もう……」

涼しい顔してなんて人だ。悪意がまったくないだけに、たちが悪い。

それはともかく、この人は仕事に対する姿勢も真面目だ。彼はこの同居を通じて、よりよい商品開発の結果を出そうとしている。私も開発部に貢献はしたい。となると……

「結局、その問題に戻るんだよね」

思わず口から零れた独り言に、稔さんが首を傾げた。

「問題？」

「だから、私達、全然夫婦っぽくないですよねって話です」

上司と部下という感覚から抜け出せないと言おうか。実際、その関係なのだから仕方ないんだけど。夫婦目線の商品評価が必要なら、もう少し私は稔さんに対する気持ちを変えなきゃいけないだろう。けれどもやっぱり稔さんは怖いし、なんか変な人だってわかつちやっだし、この人を夫と思いつむのは、なかなか難しい気がする。

腕を組んで悩んでいると、そんな私を見つめていた稔さんが、ゆつくりと口を開いた。

「つまり夫婦のようになれない原因は、七菜がまったたく俺に慣れることができず、また、俺の気持ちの原因で、余計に怖くなってしまった、ということか？」

「そつ、そうですね」

私は頷いた。自分を客観視して原因説明するなんて、なかなか普通の人にできることではない。稔さんは腕を組み、ソファに座り直して考え始める。

こんな風に難しい顔をして、長い足を組んでいる姿はとっても格好良いのになあ……

「これは提案だが、意識して夫婦らしいことをしてみてもどうだろう」

「ああ、それはいいアイデアですね。夫婦ってどんな感じなのか、コツが掴めるかもです！」

思わずグツと握りこぶしを作り言ってしまったが、夫婦のコツってなんだ。

「でも、具体的にはなにをするんですか？」

夫婦といえば共同作業だろうか。ほら、結婚式でよく『ふたり初めての共同作業です！』とか言って、ケーキ入刀するもんね。

共同作業かあ。ふたりでDIYに挑戦してみるのはいいかもね。日曜大工用品なら、ちようどハバタキキューズから出してるドライバーセットとかあるし……

「七菜、セックスをしよう」

「そうですねえ。セックス……せつくす!？」

素っ頓狂な声を上げて、私は思い切り体をのけぞらせた。しかし、稔さんがズイッと前のめりになつて近づく。

「もちろん、疑似的に、だ。君の気持ちを無視してコトを為すつもりはない」

「そつそそそう、そう、ですか。えええ、いや！ 疑似的でも、疑似的ってどういう!？」

頭が大混乱するままに問い質すと、稔さんはどアップのまま、真剣な表情で頷く。

「少しづつ、君に触れる。無理強いはいしない。夫婦はこういうやりとりをするのだと、理解する程度の触れ合いをしようということだ」

「な、なるほど……?」

一応頭では納得したものの、あまりに奇想天外な発想すぎて気持ちがついていかない。

というか、疑似とはいえ、セックスって、「やろう!」と言われて「おうよ!」なんて即座に返答できるものだろうか。普通断るよね?

「失礼を承知で聞くが、君にセックスの経験は?」

「あつ……あり……ます」

問われるままに答えてしまったが、今、めちゃくちゃセクハラを受けたよ。

——確かに私はセックスの経験がある。……ある、けど。

自然と、自分の表情が沈んでいくのがわかった。私にとって、セックスの経験は、決しているものではなかったのだ。

「七菜?」

「あ、いえ、その。一応、セックスの経験はあります。……ダメですか?」

なぜか勝手に口から零れ出た。どうして『ダメ』なんて聞いちゃったんだろう。

穂さんは不思議そうに首を傾げる。

「俺には俺の歩んだ人生があり、君にも君が歩いた人生がある。経験豊富なのはいいことではないか?」

「えっ、あー……そ、そうですね。あははっ、いや、経験豊富ってほどじゃないですけど」

照れ笑いして、両手を横に振る。

そうだよ。なんで『ダメ』なんだ。穂さんが言った通り、私の歩んできた人生の中で『彼』と出会ってつきあった経験は、誰かの評価にさらされて貶されるようなことではない。

……でも、そうか。なんとなくだけど、わかった。

私はあの『過去』を、消し去りたいんだ。イヤな思い出だから、忘れたいんだ。でも、私の頭は都合よく記憶を消去してくれるわけがないから、後悔している。自分の体が『彼』によって荒らされてしまったこと。……それを、うしろめたく思っていることを。

「さっきも言ったんですけど、私、男性がちよつと怖いんです」

「ああ」

「セックスも、経験はありますけど、あまり……その、いい思い出でもなくて」

なにを言ってるんだろう。恥ずかしいし、こんなことを言っても仕方ない。

私、やっぱり、無理なのか。穂さんが相手なら克服できるかなって思ったけど、過去はまだ乗り越えられないのかな。

俯いていると、ぼん、と頭に大きな手がのせられた。

「あ……」

穂さんが、不器用そうな手つきで、私の頭を優しく撫でる。

「君の過去は知らないが、男性が苦手だとして、それでも俺と共同生活することを了承したのは、理由があるんだろう?」

まるで、私の心を見透かしたような言葉に、自然と頷く。彼の言う通りだったから。

「稔さんは、色恋沙汰の噂話ひとつ聞かないし、仕事一筋な人だから、一緒に住んでも大丈夫かなって思ったんです。それをきつかけにもしかしたら、男性が苦手なのも克服できるかなって」

「ふむ。つまり君は、男性恐怖症を治したいという意味があるということか」

「……いつまでも、このままでいいとは思っていません」

私の過去のことは、両親も知っている。稔さんが挨拶に来て、やたらテンション高く稔さんを受け入れていたのは、そのことも関係しているんだろう。

稔さんなら大丈夫だと両親は思った。過去を乗り越えたいと思っているのは、私だけでなく、両親もなんだ。

でも、なかなか難しい。どうしても『怖い』という気持ち拭えない。

「それなら、なおさら俺に任せてみないか？」

私は顔を上げた。目の前には、真剣な表情で私を見つめる、稔さんの姿がある。

「俺は、俺のやり方でしか君を愛することはできない。しかし乱暴にするつもりはないし、できるだけ優しく触れる。……だが、それでも無理だった場合は、別の方法を探そう」

さら、と私の髪を撫でる、稔さんの大きな手。

それだけで、不思議と心が柔らかくなった気がした。緊張で固まっていた体が、ゆっくりとほぐれていく。

……稔さんなら、痛いことをしないかもしれない。

私を、乱暴に扱わないかもしれない。

これで騙されたら、いよいよ私の心は大ダメージを食らうだろうけど、稔さんはそんな酷いことをしないという確信があった。

その理由は——やっぱり真面目な人だからかな。ちよつと変なところはあるけれど、シン、とリビングが静まりかえる。

稔さんは黙って、私の出す答えを待っていてくれた。決して急かしたりせず、私の気持ちを尊重してくれているんだ。

——そんな人が、私を傷つけるようなこと、するはずがない。

震える手で、そつと稔さんの袖を掴んだ。彼の眼鏡がきらりと光る。

「……いや、つて言ったら……やめて、くれますか？」

「ああ、すぐにやめよう」

間髪容れずに即答する。実に稔さんらしい返答だ。

私は心の中でほんの少し笑い、決意して、深く頷いた。

「ちよつとだけ……。本当に、ちよつとだけ……で、いいなら……」

まだ怖くて、すべてを許す境地には至っていない。

それでも、変わりたいと思うから——私は、稔さんの手を取ろうと決めた。

「わかった。君のペースに合わせて、君を愛そう」

優しく頬を撫でられる。彼の優しさに、私は心から感謝した。